

## 施設実習に於けるケース研究報告集の 個別介護過程の展開に関する考察

青木 君代・村岡 洋子・田岡 洋子

京都短期大学 生活福祉科 介護福祉専攻

### A Development of Individual Course of Care Service based on the Report on the Practical Training in Care Facilities

**要旨** 介護福祉士養成に於いて施設実習450時間のカリキュラムの中では、個別の介護過程の展開が出来るようになることが目標の一つとされている。本学は、開学当初より施設実習の450時間を3段階に分け（1段階90時間、2、3段階180時間）特に3段階を実習の総まとめとして、個別介護過程の展開が出来るように指導してきた。今回1～5期生の185名の学生が個別介護実習において、受け持ち利用者とした方について、その動機がどのようなものであるのか、受け持ち利用者の主な病名と、その利用者に対する援助内容の展開がどうであったのか、又その展開の結果および考察を学生がどのように行っているのかを調査した。さらに、本学が作成した評価基準による評価を基に1) 援助内容の評価と2) 学生の学びの評価の相関関係を見たいと考え、SPSS解析ソフトを使い、ピアソン係数を出した。その結果を踏まえて、今回の研究資料をベースに今後の学生指導について考察する。

**キーワード** 個別の介護過程、動機、援助内容、評価基準、相関係数

**Key words:** Individual Care Course, Practical training, Corelation

### 1. はじめに

本学は平成9年介護福祉士養成校として定員40名で発足し、今年で8年目を迎えており、1～5期の間185名の卒業生を送り出している。施設実習の教育カリキュラムの450時間を第一段階実習90時間、第二、第三段階実習各180時間とし、特に第三段階実習を実習の総まとめと位置づけ、その中でも個別介護過程の展開（情報収集、アセスメント、問題点の抽出、目標設定、計画立案、実施、評価、修正、変更）が出来る様になることを目標としている。このことは個別介護過程の展開をすることで介護が行動の科学として裏付けられ、学生が思考過程を通して介護の実践能力を高めることができると共に、学内で学び得た知識、技術、人間性の尊重の理論が施設現場で実際にどのように統合され、実践し得るかという点に於いて、重要な意味を持っている。我々は学生が介護を実践する中から、利用者との関わりの重要性を学び、介護福祉の本質的価値が認識出来るようになることを望んでいる。

本学は、各学生が第三段階実習終了後の報告会で個別介護過程の展開を発表し、その発表をケース研究報告集として残している。今回その報告集から185名（1期生から5期生迄）の学

生が行った個別の介護過程の展開がどのようなものであったのか、また介護展開する中から介護の本質や価値の学びをどのように捉えているのかを、本学で作成した評価基準に基づいて分析、評価し、今後の学生の指導の示唆を得ることができたので報告する。

## 2. 研究方法

- 1) 卒業生185名の個別介護過程の展開を次の3項目に分類(平成10, 11, 12, 13, 14年度)した。
  - (1) 受け持ち決定するに当たっての学生の動機(視点)
  - (2) 受け持ち決定した利用者に行った学生の援助内容
  - (3) 学生による結果及び考察
- 2) 卒業生185名の個別介護過程の学生の動機(視点)をKJ法で15項目に整理した。
- 3) 2)の動機別分類した15項目に基づいて、卒業生185名の個別介護過程の学生の援助内容を分類した。
- 4) 卒業生185名の個別介護過程について学生自身による結果及び考察を、教員が作成した評価基準に基づいて分析し評価を行い今後の学生指導の指針とした。

## 3. 結果及び考察

### 3-1. 個別介護過程において、学生の受け持ち利用者を決定した動機(視点)をKJ法で整理した結果 図1

- 1) 先ず学生の受け持ち決定時の動機についてKJ法を用いて15の項目に整理した。
  - ①「ボーとしている」は53名で最も多く、これは施設内に於いて何もする事がなく、日中の大半をボーと過ごしている利用者である。
  - ②「他の利用者と交流がない」は10名で、これは居室内やホールにいても他の利用者との会話や交流がない状態である。次いで
  - ③「する事がない」が13名でこのことは、施設内で行われているレクリエーションやクラブにも参加せず、又本人自身趣味がなかったり、自分がしたい事が施設内では行えない、また何となくテレビを常時見て過ごしている等の状態の利用者である。  
これらの①、②、③をまとめて「する事がなくボーとしている」とした。その割合は185名中41.1%と高率を示している。次いで
  - ④「やりたい事があるが出来ない」13名であった。これには利用者のやりたい内容、例えば施設内での作業がしたいが日時が分からないとか、施設外の人と文通がしたいが文字が書けないとか、絵を書きたいが月一回しか絵のクラブがないとか、楽器を鳴らしたい

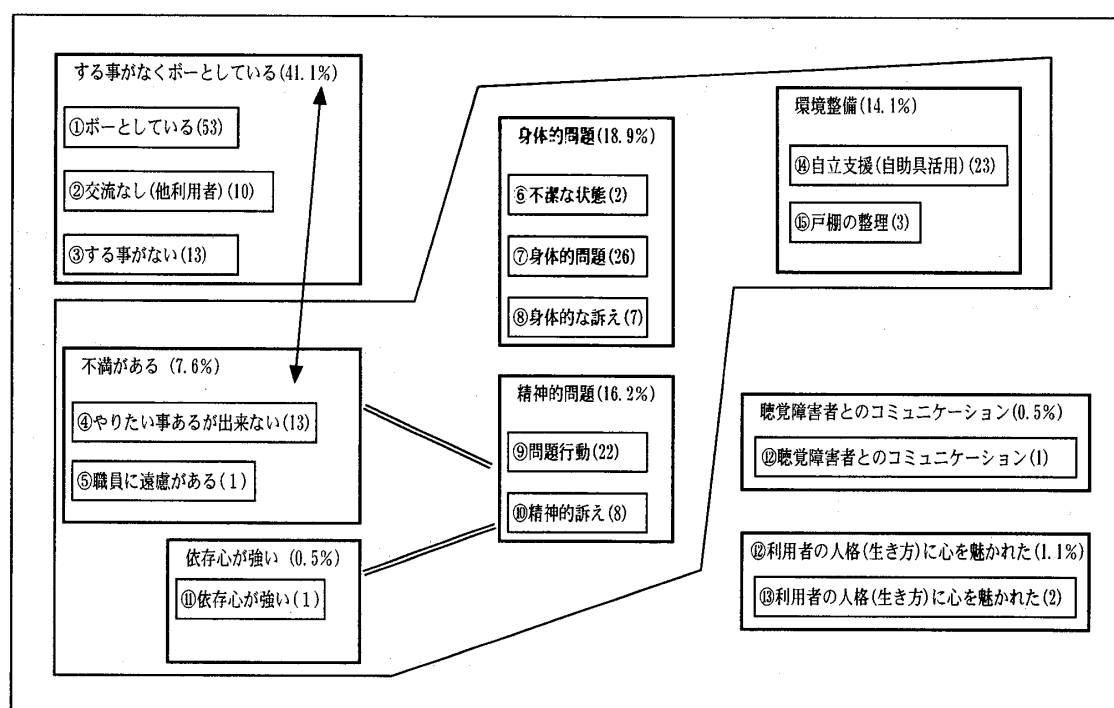


図1 受け持ち決定時の学生の動機(視点)分類 (185名)

が手が不自由等であった。

- ⑤「職員に遠慮がある」は、1名で歌を歌いたいのだが、視力障害の為歌詞が分からず歌えないが職員に遠慮があって言えないというものであった。これら④と⑤をまとめて「不満がある」とし全体的に7.6%と低い率だが、利用者の本音が現れているように考えられる。次いで
- ⑥「不潔な状態」は2名であった。これは汚れた手で目をこすり充血や眼脂がある場合や、又鼻汁や眼脂があっても放置したまま、特に鼻汁は食事摂取時に一緒に食べているといったものであった。次いで
- ⑦「身体的問題」は26名で、全体で2番目に多い人数であった。これは食事の時車椅子の上で体が左右に傾いていたり、上肢に麻痺があり車椅子操作が困難であったり、立位が不安定である。車椅子よりベット移乗が困難と言ったものであった。
- ⑧「身体的な訴え」は7名で、これは夜間眠れないとか、車椅子を使用している時の腎臓部痛や移乗時にふらつくといったものであった。⑥と⑦と⑧をまとめて身体的問題とした。18.9%であった。
- ⑨「問題行動」は22名で比較的多い値を示している。その内容は痴呆性高齢者に多い帰宅願望であったり、無断外出や、収集癖、徘徊、暴力、衣服の破損等であった。
- ⑩「精神的訴え」は、8名で常に悲観的でマイナス思考や寂しがりやであったり、精神的

不安定な状態の人である。これらの⑨と⑩をまとめて「精神的問題」16.2%とした。

⑪は「依存心が強い」が1名で車椅子よりタンスの中の物を取る事が出来るのに他人にとっ  
てもらおうとする、という傾向がある人のことである。⑪についてはまとめる事が出来  
ない為単独であげる事にした。

⑫の「聴覚障害者とのコミュニケーション」については、本学が実習施設としている17の  
特別養護老人ホームのうちの1施設が聴覚障害施設であり、そこでの利用者とのかかわ  
りの中で、学生が施設建設運動に参加され書籍を出版された利用者の生活に興味を持ち、  
健常者と聴覚障害者とのコミュニケーションの重要性を学んだという状況から生じたも  
のである。⑫についてもまとめることが出来ず、単独であげた。

⑬については、「利用者の人格(生き方)に心を魅かれた」が、2名でこの内容は自立心、  
プライドの高い利用者に対して、人権を尊重し、利用者の意思やアイデアを尊重して、  
残存能力を活かしながら、自助具を共同で考案したり、また利用者の書籍を発行され、  
自立心の強い人である事が分かったり、また利用者自身が自分にとって一番良い援助を  
受けることに徹しておられる等であった。この項についても、他とまとめる事が出来な  
いので、このまま単独であげることにした。

⑭「自立支援(自助具の活用)」は23名であり、比較的多い値を示している。

この内容には、スプーンの使用が困難な方のために自助具を考案したり、年賀状が書  
けない方の為に、短文の文字版を作成したり、歯ブラシ使用を容易にするためにグリッ  
プ部分の工夫や、食事時の姿勢保持目的での介助テーブル作成や、クッションの活用な  
どがあった。

⑮「戸棚の整理」の3名は、床頭台の中が散乱しているのを整理したり、またベッド上散  
らかっているのを、整理する為の収納袋を設置したり、ベッド周囲の雑然としている荷  
物の整理を行った等であった。

⑭と⑮をまとめて、生活環境を整えるものとして、「環境整備」とし、14.1%であった。

## 2) 図1のまとめ

「する事がなく、ボーとしている」(41.1%)と、「不満がある」(7.6%)とは相反するこ  
ととして位置づけました。又「身体的問題」と「精神的問題」をタイアップさせ、又「環境  
整備」とも、くくり、「不満がある」。「依存心が強い」を加えてこれらは何らかの言動の表現  
をしているものとして1つにまとめた。

また、「精神的問題」と「不満がある」と「依存心が強い」を、関連あるものとした。

⑫の聴覚障害者とのコミュニケーションや⑬の利用者の人格に心を魅かれたというのは、そ  
れぞれ個別のものとした。

### 3) 各項目の出現率

①から⑮の各項目の出現率を図2に示した。

学生185名に於ける内容で、動機の1位は①のボーとしているが29%でトップで、2位は⑦身体的問題14%、3位⑨問題行動と⑭自立支援(自助具)の順であった。

### 4) 各学生別の各項目の出現率

各学年別の受け持ち利用者決定時の動機を図3に示す。

受け持ち決定時の学生の動機を学年別に見ると、全体で第1位であった「ボーとしている」については1～5期生を通して数値が高い。しかし、全体を通して2位である⑦「身体的問題」、3位である⑨「問題行動」と「自立支援」については、各学年によってかなりのバラつきがある。特に「身体的問題」において4期生が突出して高率を示している。このことは、実習中に学生間に、携帯電話やメールでかなりの情報の交流があり、各学年ごとに一種の連鎖反応が起こっていることが一因であると考えられる。

ただし、「身体的問題」の中でも、学生の多くが利用者の姿勢—例えば食事中や、歩行時、車椅子上の姿勢—に着目しており、学生にとって捉えやすく、利用者の外面的な生活状態に対して、何らかの刺激が必要であると考えていることが推察される。「問題行動」も利用者の言動の状態が表面化しており、容易に観察し得る為に捉え易い傾向にあると考えられ、「自立支援(自助具活用を含む)」もその必要性が、観察し易いために取上げる機会が多くなっていると考えられることができる。

ただし、「身体的問題」の中でも、学生の多くが利用者の姿勢—例えば食事中や、歩行時、車椅子上の姿勢—に着目しており、学生にとって捉えやすく、利用者の外面的な生活状態に対して、何らかの刺激が必要であると考えていることが推察される。「問題行動」も利用者の言動の状態が表面化しており、容易に観察し得る為に捉え易い傾向にあると考えられ、「自立支援(自助具活用を含む)」もその必要性が、観察し易いために取上げる機会が多くなっていると考えられることができる。

### 3-2. 受け持ち利用者の属性

#### 1) 受け持ち利用者の身体的症状

高齢者は種々の病気に罹患しており、いくつもの合併症を併発している人も多いが、ここでは主な病名を一つだけ挙げておいた。中でも老人性痴呆とアルツハイマー型痴呆と、脳血管性痴呆を合わせると48%を占めており、約過半数であった。この事から、痴呆性高齢者の介護についての学びが強く求められていることがわかる。

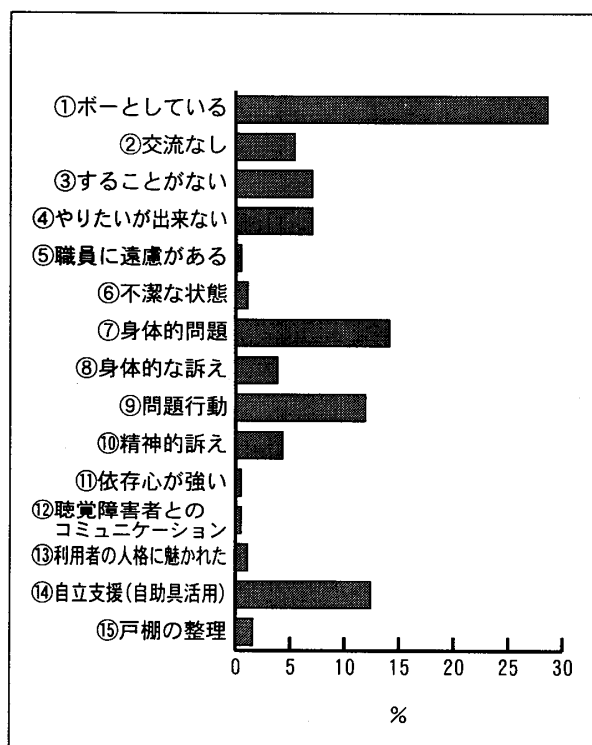


図2 受け持ち決定時の学生の動機(全体185名)

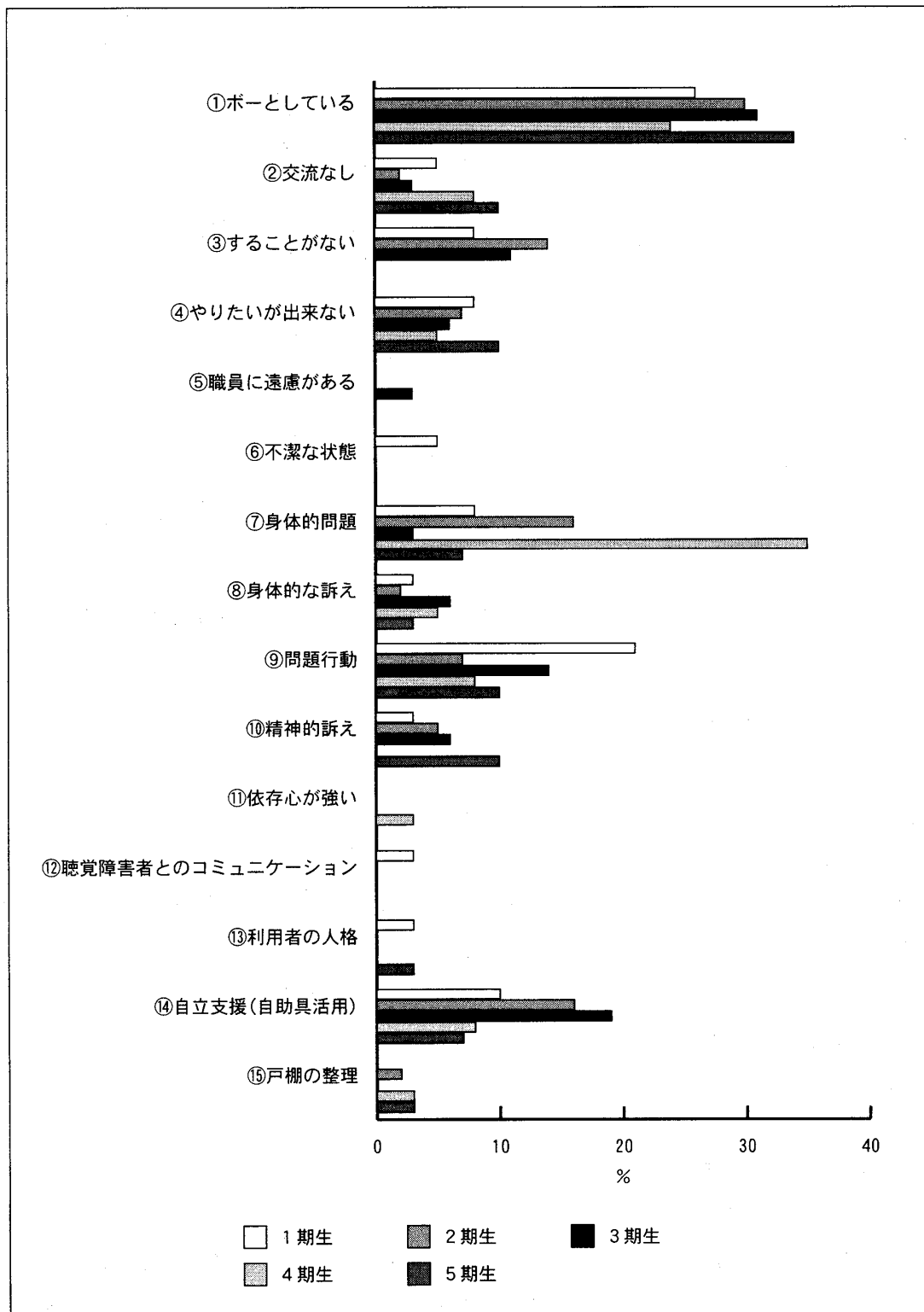


図3 受け持ち決定時の学生の動機 1～5期生別

## 2) 受け持ち利用者の男女比と平均年齢

学生が受け持った利用者は、男女比 2 : 3 で平均年齢 76.8 歳であった。

### 3-3. 援助内容について

受け持ち利用者を選んだ動機別の 15 項目に対して、学生がどのような内容の援助を行ったのかを、整理・分類すると、図 5、図 6 に示すように総計 122 項目になった。この中で、コミュニケーションやリハビリテーション、工作などは、いくつかの動機別分類 15 項目の中に重複して挙げられており、学生が援助展開を行ううえでこれらの援助内容を重要であると考えていたためと推察することができる。動機の 15 項目のうち最も多くの学生が挙げた「ボーとしている」についての援助内容は、「施設内活動を薦めた」が 12 名で最も多く、次いで「年賀状作成(書くも含む)」、「絵を描く」、「日記を書く」が 9 名、「タオルたたみ」と「工作」が 3 名の順であった。

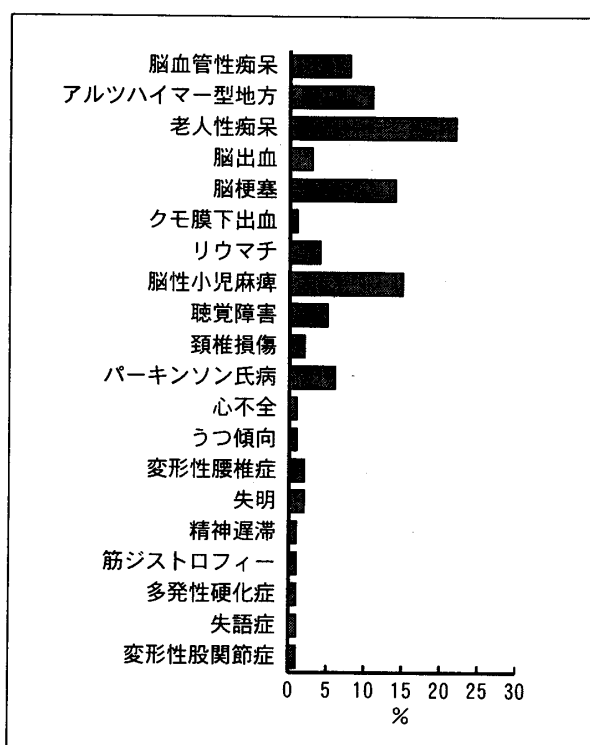


図 4 受け持ち利用者の主な病名  
全体 185 名 平均年齢 76.8 才 男女比 = 2 : 3

### 3-4. 評価基準について

個別介護の展開に対する評価の基準として、

1. 利用者への援助内容が、「利用者の生活の質に繋がり、介護となり得ているか」という視点から以下の 6 項目を設定した。
  - 1) 精神面での活性化に繋がられたか
  - 2) 身体面の活性化に繋がられたか
  - 3) 利用者が今やりたいと思っていた事の援助となったか
  - 4) 自己実現(他から認められる)の援助となったのか
  - 5) 環境(生活しやすい)の改善や自助具の考案が生活の快適さに、繋がったか
  - 6) 昔とった杵柄や、生涯学習に繋がる趣味活動等を、引き出す事が出来たか(編み物、和裁、手芸など)
- さらに
2. 「個別介護過程の展開を通してどのような学びをしたか」という視点から以下の 8 項目を

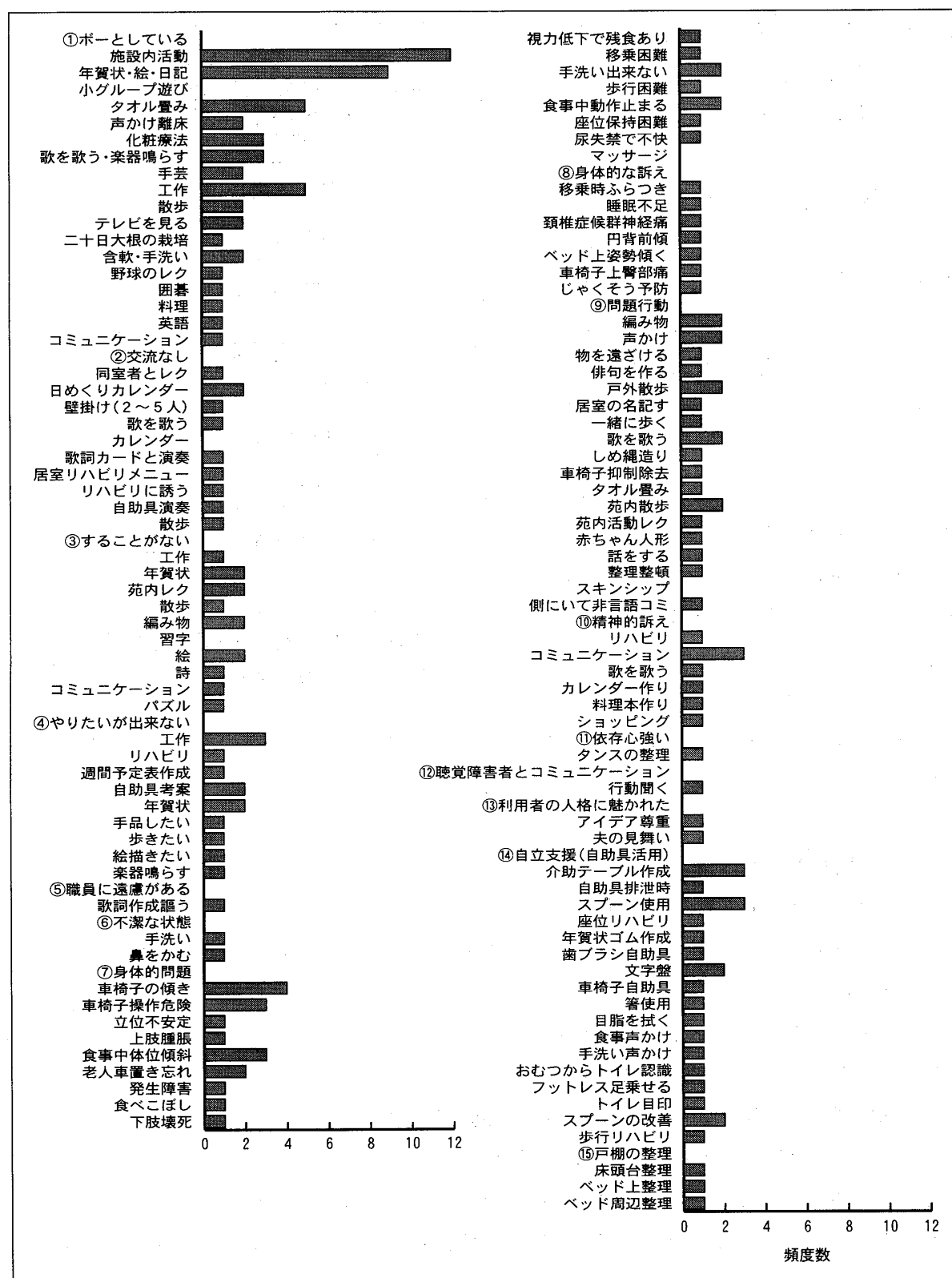


図5 援助内容 (全体185名)



①ボーとしている	53	睡眠不足	1
施設内活動	12	頸椎症候群神経痛	1
年賀状・絵・日記	9	円背前傾	1
小グループ遊び	0	ベッド上姿勢傾く	1
タオル畳み	5	車椅子上臀部痛	1
声かけ離床	2	じゃくそう予防	1
化粧療法	3	⑨問題行動	22
歌を歌う・楽器鳴らす	3	編み物	2
手芸	2	声かけ	2
工作	5	物を遠ざける	1
散歩	2	俳句を作る	1
テレビを見る	2	戸外散歩	2
二十日大根の栽培	1	居室の名記す	1
含軟・手洗い	2	一緒に歩く	1
野球のレク	1	歌を歌う	2
囲碁	1	しめ縄作り	1
料理	1	車椅子抑制除去	1
英語	1	タオル畳み	1
コミュニケーション	1	苑内散歩	2
②交流なし	10	苑内活動レク	1
同室者とレク	1	赤ちゃん人形	1
日めくりカレンダー	2	話をする	1
壁掛け(2~5人)	1	整理整頓	1
歌を歌う	1	スキンシップ	0
カレンダー	0	側にいて非言語コミ	1
歌詞カードと演奏	1	⑩精神的訴え	8
居室リハビリメニュー	1	リハビリ	1
リハビリに誘う	1	コミュニケーション	3
自助具演奏	1	歌を歌う	1
散歩	1	カレンダー作り	1
③することがない	13	料理本作り	1
工作	1	ショッピング	1
年賀状	2	⑪依存心強い	1
苑内レク	2	タンスの整理	1
散歩	1	⑫感覚障害者とコミュニケーション	1
編み物	2	行動聞く	1
習字	0	⑬利用者の人格に魅かれた	2
絵	2	アイデア尊重	1
詩	1	夫の見舞い	1
コミュニケーション	1	⑭自立支援(自助具活用)	23
パズル	1	介助テーブル作成	3
④やりたいが出来ない	13	自助具排泄時	1
工作	3	スプーン使用	3
リハビリ	1	座位リハビリ	1
週間予定表作成	1	年賀状ゴム作成	1
自助具考案	2	歯ブラシ自助具	1
年賀状	2	文字盤	2
手品したい	1	車椅子自助具	1
歩きたい	1	箸使用	1
絵描きたい	1	目脂を拭く	1
楽器鳴らす	1	食事声かけ	1
⑤職員に遠慮がある	1	手洗い声かけ	1
歌詞作成謳う	1	おむつからトイレ認識	1
⑥不潔な状態	2	フットレス足乗せる	1
手洗い	1	トイレ目印	1
鼻をかむ	1	スプーンの改善	2
⑦身体的問題	26	歩行リハビリ	1
車椅子の傾き	4	⑮戸棚の整理	3
車椅子操作危険	3	床頭台整理	1
立位不安定	1	ベッド上整理	1
上肢腫脹	1	ベッド周辺整理	1
食事中体位傾斜	3		
老人車置き忘れ	2		
発生障害	1		
食べこぼし	1		
下肢壊死	1		
視力低下で残食あり	1		
移乗困難	1		
手洗い出来ない	2		
歩行困難	1		
食事中動作止まる	2		
座位保持困難	1		
尿失禁で不快	1		
マッサージ	0		
⑧身体的な訴え	7		
移乗時ふらつき	1		

図6 援助内容(全体185名)

設定した。

- 7) 利用者の身体的・精神的・社会的な観察と共に、情報収集が的確に出来、全体像及びニーズの把握と共に残存能力の見極めが出来たか
- 8) コミュニケーションの技術を理解し充分実践出来たか。(傾聴、かかわり技法、共感、自己開示を引き出す等)
- 9) 利用者の生活に於いて、失われたものを取り戻すという生活の再構築となったか(機能訓練、自助具の活用)
- 10) 介護の原則である安全、安楽、自立支援の意義を、援助を通して見出すことが出来たか
- 11) 人権の尊重は出来たか(援助を通じて相手の人権を尊重することを会得出来たか)
- 12) 介護とはどういうものか理解出来、やりがいや、喜びを見出すことができたり、実感することが出来たか
- 13) 援助展開に於いて、応用能力、アイデアを活かすことができたか
- 14) 利用者との関わりの中で、人間として自己成長ができたか

以上の14項目の評価基準に基づいて、学生一人一人についてチェックを行い、表1に示すよ

表1 評価基準

(A良い・B普通・C要努力・D不可)

	No.	内 容	評 価			
			A	B	C	D
利用者への援助内容		生活の質(QOL)の向上に繋がり介護となり得ているか				
	1	精神面での活性化に繋がられたか(言語的・非言語的コミュニケーションの活用)				
	2	身体的での活性化に繋がられたか(AOLの維持と向上)				
	3	利用者が今やりたいと思っている事の援助となったか				
	4	自己実現(他から認められる)の援助となったか				
	5	環境(生活し易い)の改善や自助具の考案により生活の快適さに繋がったか				
学生への学び	6	昔とった杵柄や生涯学習に繋がる趣味活動等を引き出す事が出来たか(編み物・和裁・手芸等)				
	7	利用者の身体的精神的社会的な観察と共に、情報収集が的確に出来、全体像及びニーズの把握と残存能力の見極めが出来たか				
	8	コミュニケーションの技術を理解し、充分実践出来たか(傾聴・かかわり技法・共感・自己開示等を活かし利用者との信頼関係や利用者の自己開示を引き出す)				
	9	利用者の生活に於いて、失われたものを取り戻すという、生活の再構築となったか(機能訓練・自助具等)				
	10	介護の原則である安全・安楽・自立支援の意義を援助を通して、見出す事が出来たか				
	11	人権の尊重は出来たか(援助を通して相手の人権を尊重することを会得出来たか)				
	12	介護とは、どういうものか理解出来、やりがいや喜びを見出すことができたり、実感することが出来たか				
	13	援助展開において応用能力、アイデアを活かすことができたか				
	14	利用者との関わりの中で、人間として自己成長ができたか				

うに各14項目についてA、B、C、Dの4段階の評価を行った。

(A=90～100、B=70～89、C=60～69、D=59以下)

上記のような評価を全学生および学年別に単純集計した結果は表2-1、2-2のようである。

さらに各項目についてAに4点、Bに3点、Cに2点、Dに1点を配点して全学生の評価結

表2-1 全学生および学年別に集計した「利用者への援助内容」「学生の学び」の14項目の評価

(A良い・B普通・C要努力・D不可)

項目	各期生 評価	1期生(39名)				2期生(44名)				3期生(36名)				4期生(37名)				5期生(29名)				合計(185名)			
		A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
利用者への援助内容	1 精神面の活性化	8	1	3	0	10	1	2	0	4	6	4	0	7	4	1	0	4	3	1	0	33	15	11	0
	2 身体面の活性化	6	3	3	0	8	10	3	0	8	3	1	0	6	2	4	0	9	2	1	0	37	20	12	0
	3 今やりたいこと	3	0	2	0	2	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	10	1	2	0
	4 自己表現	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	4	0	0	0
	5 環境改善	1	0	2	0	1	2	0	0	4	0	0	0	5	2	1	0	2	2	0	0	13	6	3	0
	6 昔とった杵柄	3	2	0	0	4	1	0	0	1	1	0	0	3	1	0	0	2	0	0	0	13	5	0	0
	合 計	23	6	10	0	25	14	5	0	20	11	5	0	22	9	6	0	20	7	2	0	110	47	28	0

表2-2 全学生および学年別に集計した「利用者への援助内容」「学生の学び」の14項目の評価

(A良い・B普通・C要努力・D不可)

項目	各期生 評価	1期生(39名)				2期生(44名)				3期生(36名)				4期生(37名)				5期生(29名)				合計(185名)			
		A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
学生の学び	7 観察と情報収集	2	1	1	0	5	4	2	0	1	1	2	0	2	3	3	0	5	1	2	0	15	10	10	0
	8 コミュニケーション	3	3	1	0	4	2	2	0	0	4	3	0	0	4	1	0	1	1	0	0	8	14	7	0
	9 生活の再構築	6	2	2	0	8	2	1	0	12	2	0	0	5	5	2	0	5	2	0	0	36	13	5	0
	10 介護の原則	1	2	1	0	3	3	0	0	4	1	1	0	4	1	2	0	2	0	0	0	14	7	4	0
	11 人権の尊重	6	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	12	0	0	0
	12 介護理解やりがい実感	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0
	13 応用能力	1	1	5	0	2	1	2	0	2	1	2	0	2	1	0	0	3	2	1	1	10	6	10	1
	14 自己成長となった	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
	合 計	20	9	10	0	25	12	7	0	19	9	8	0	15	14	8	0	19	6	3	1	98	50	36	1

表3 全学生の「援助内容」と「学生の学び」14項目の評価結果

No.	個別介護援助評価	平均点	対象人数	合計点	No.	学生の学び評価	平均点	対象人数	合計点
4	自己実現	4	4	16	11	人権の尊重	4	12	48
6	昔とった杵柄	3.72	18	67	12	介護理解やりがい実感	4	2	8
3	今したいこと	3.62	13	47	14	自己成長となった	4	1	4
5	環境改善	3.45	22	76	9	生活の再構築	3.57	54	193
1	精神面の活性化	3.37	59	199	10	介護の原則	3.4	25	85
2	身体面の活性化	3.36	69	232	7	観察と情報と情報処理	3.11	35	109
			185		8	コミュニケーション	3.03	29	88
					13	応用能力	2.93	27	79
								185	

果を求めると、表3に示す。

### 3-5. 『援助内容』と『学生の学び』の14項目において評価の対象になった学生数（％）

各項目について、評価の対象（A～D）となった学生数、即ちその項目に関心を持った学生の数（％）を求めた。全学生および各学年別について得られた結果を表4に示す。

全学生に於ける『援助内容』についての上位5項目に評価を得た学生数（％）185名のうち下記のようなのである。

- 1位 身体面の活性化 37％
- 2位 精神面の活性化 32％
- 3位 環境の改善 12％
- 4位 昔とった杵柄 10％
- 5位 今やりたい事 7％

であった。

「今やりたい事」が5位で7％である事は、ボーとしている利用者とコミュニケーションを

表4 各項目に関心をもって展開した学生の数（％）

	No.		全185名	1期生39名	2期生44名	3期生36名	4期生37名	5期生29名
援助内容	2	身体面の活性化	1位・37％	2位・31％	1位・48％	2位・33％	2位・32％	1位・34％
	1	精神面の活性化	2位・32％	1位・42％	2位・30％	1位・39％	1位・33％	2位・27％
	5	環境改善	3位・12％	5位・8％	4位・7％	3位・11％	3位・22％	3位・14％
	6	昔とった杵柄	4位・10％	3位・13％	3位・11％	5位・6％	4位・11％	4位・7％
	7	今やりたいこと	5位・7％	3位・13％	5位・5％	3位・11％	6位・0％	4位・7％
学生の学び	4	生活の再構築	1位・29％	1位・25％	1位・25％	1位・39％	1位・33％	2位・24％
	7	観察と情報収集	2位・18％	6位・8％	1位・25％	5位・12％	2位・21％	1位・27％
	8	コミュニケーション	3位・16％	2位・19％	3位・19％	2位・19％	4位・14％	5位・6％
	10	介護の原則	4位・14％	5位・11％	4位・14％	3位・17％	3位・19％	4位・7％
	3	応用能力	4位・14％	2位・19％	5位・12％	4位・15％	5位・8％	3位・16％
	11	人権の尊重	6位・6％	4位・15％	6位・7％	6位・0％	6位・5％	6位・3％

とって、やりたいことを引き出しても、それを施設で実現することは、困難であったという結果を表している。

各期生に於ける援助内容について評価された学生数(%)を見ると、1～5期生に共通して、1、2位が「身体面の活性化」と、「精神面の活性化」であった。

「学生の学び」に於いては、1位が「生活の再構築」で29%を占めている。この事は、生活の中で失われた習慣、例えば朝の洗顔や歯磨き、トイレ後の手洗い等、過去に出来ていた内容を取り戻したり、又自助具の考案と工夫により、以前の生活機能を取り戻すといった点で、学びが深められていることが察せられる。

2位は「観察と情報収集」で 18%

3位は「コミュニケーション」で 16%

4位は「介護の原則と応用能力」で14%となっている。

1～5期生まで共通して言える事は利用者の生活に於いて、「失われたものを取り戻すという生活の再構築となったか」という事が、1、2位を占めている。又「コミュニケーションの技術を理解し充分実践出来たか」という内容においては、1～3期生が2、3位となっており、学生達はコミュニケーションの技術の重要性を認識し、学びを深めていると思われる。

1期生の「応用能力」の学びは、19%と高率を示しているが、表2-2を見ると関った学生7人の中で、Aが1人、Bが1人、Cが5人と評価の値は低いところに止まっている。

この事は応用能力の学びの大切さは学び得たが、それを実践する力には、結びつかずに終わっていることを示している。それに比べて5期生(16%)は、応用能力の評価が、Aが3人、Bが2人、Cが1人と実践出来ている例が多くなっており、1期生と5期生との間に介護展開内容の応用力に差が見られた。

この事は、施設の指導力や教員の指導力が、徐々に向上している結果であると思われる。

「人権の尊重」は、全学年(185名)で6位、各期生別に見ても、2期生から5期生までが6位となっている。この事は、利用者の人権の尊重を現場で実践するのは難しいものであり、今後この点において指導を強化する必要があると考える。

### 3-6. 援助内容の評価と学生の学びの評価の相関関係

利用者への援助内容の評価と学生の学びの評価の相関関係をSPSSの解析ソフトを用いてピアソン相関係数によって求めた。

有意性のあるものを表5に示す。

表5から分かるように、「精神面の活性化」に於いては、「コミュニケーション」との間に一番強い相関関係があった。「今やりたい事」においては、「人権の尊重」との間に一番強い相関関係があり、次で「観察と情報収集」に相関関係が認められた。

表5 個別介護援助評価と学生の学び評価 相関係数の検定

学生の学び評価	個別介護援助評価					
	精神面の活性化	身体面の活性化	今したいこと	自己実現	環境改善	昔とった杵柄
観察と情報収集			0.185*			
コミュニケーション	0.257**	-0.167*		0.189*		
生活の再構築		0.221*				
介護の原則		0.186*				
人権の尊重		-0.156*	0.208**			
介護理解やりがい実感						
応用能力自画自賛						
自己成長となった						

- 危険率5%で6個、危険率1%で2個の優位性が認められた。\*\*\* P<0.000
- 「精神面の活性化」には「コミュニケーション」が一番強い関係があり、\*\* P<0.01
- 「今したいこと」には「人権の尊重」に大きな相関関係があり、次いで\* P<0.05
- 「観察と情報収集」にも相関関係が見られる。
- 「身体面の活性化」には「生活の再構築」「介護の原則」に相関関係があるが、「コミュニケーション」「人権の尊重」についてはよいコミュニケーションがとれていない例が多くあってマイナスの相関関係となっている。
- 「自己実現」には「コミュニケーション」がプラスの相関関係を示している。
- 「コミュニケーション」は個別介護援助「精神面・身体面の活性化」や「自己実現」をする上で、大変有意であり、
- 「人権尊重」は「今したいこと」にプラスの強い相関関係を示し、「身体面の活性化」にマイナスの相関関係である。
- また、「観察と情報収集」「生活の再構築」「介護の原則」は個別介護援助に相関関係があることを示している。

「身体面の活性化」に於いては、「生活の再構築」と「介護の原則」との間に相関関係があるが、「コミュニケーション」と「人権の尊重」に於いては、マイナス相関であった。

マイナス相関については、学生の185名中69名が「身体面の活性化」の援助内容を実行しており、学生が援助展開を行う上で、コミュニケーション技術や、人権の尊重といった点で不十分であったと言う結果から、マイナス相関になったと考える。

学生の学びの評価から見ると、コミュニケーションは、個別介護援助すなわち「精神面、身体面の活性化」や「自己実現」をするなど全ての援助を行う上で、大変有意であることが実証された。又「人権尊重」については、「今やりたいこと」にプラスの強い相関を示し、身体面での活性化とはマイナス相関となっている。利用者の「今やりたいこと」を引き出すためには、人権尊重の視点が大切だと思っているが、「身体面での活性化」においては余り重視されていなかったことが分かる。

全体的に見ると、「コミュニケーション能力」と共に「人権の尊重」は介護の展開に極めて大切であり、人権の尊重の上に立って、コミュニケーションの能力の向上を図るように、指導することが求められている。

#### 4. ま と め

これまでもわれわれは、学生を指導するに当たって以下のようなことを意識してきた。即ち

1. 援助展開の中で、利用者のやり甲斐や自己実現は難しく、今後の指導課題である。
2. 個別指導を重点的に行い、中でも記録のチェックは、学生の介護に於ける学びの思考展開を知る上で重要である。
3. 教員の質の向上、教員間の連携の充実を図ることが必要である。
4. 介護実践の内容を通じて、介護の本質の把握と、学生自身の課題と解決策を明確にする。

今回の個別介護過程の展開の集計によって

5. コミュニケーションや人権尊重が、介護展開に極めて重要であることが明確になった。従って、人権尊重の上に立ったコミュニケーション技術を高める指導が求められると考える。

今回の研究資料をベースにさらに多方面からの考察を加えて今後の学生指導に活かしたいと考える。

#### 参考文献

- 「施設実習に於けるケース研究報告集」(平成10、11、12、13、14)  
「平成15年度介護協全国教職員研修会 第4分科会のまとめ」